

# ウィリアム・ジェイムズの多元的存在論 ——「関係」概念をめぐって——

山根秀介<sup>1</sup>

要旨：本研究の目的は、ウィリアム・ジェイムズの「根本的経験論」の大きな特徴の一つと言える多元的存在論がいかなる構造を有しているかを明らかにすることにある。その際鍵となるのは、ジェイムズが言うところの「関係」の概念、とりわけ「外的関係」の概念である。この「外的関係」の内実を、ジェイムズ最大の論敵であるブラッドリーの「内的関係」の概念、及びそれによって成立する一元論的な世界観と対照させつつ明らかにすることで、「関係」が「外的」であることがいかにして根本的経験論が提出する存在論を多元的なものとしているのかを解明することを目指す。

キーワード：ジェイムズ、ブラッドリー、外的関係、多元的存在論

## 1. はじめに<sup>1)</sup>

ウィリアム・ジェイムズ（1842-1910年）が提唱した「根本的経験論（radical empiricism）」の要諦は、「諸経験を結びつける関係はそれ自体が経験される関係であり、経験されるいかなる関係も、他の一切のものと同じく、その体系において「実在的なもの」とみなされるのでなければならない（WPE/22）」と考える点にある。ジェイムズによれば、経験におけるある項とある項は、それらを結び付けている「関係」をも巻き込んだ形で経験として解されるべきである。経験において項はそれぞれ絶対的に分離しているのではなくて、項と項とをつなぐ関係によって相互に連続している。経験における各々の項の分離性を強調したヒューム的な原子論的経験論に対するアンチテーゼをここに見ることは、全く妥当なことであると思われる。

しかし他方で、ジェイムズはすべてを全き連續性として捉えようとしたわけでもない。周知の通り、彼は「連接と分離とはともかく対等の現象であって、私たちが経験を額面通りに受け取るなら、等しく実在的なものとみなされなければならない」（WPE/26）としたのであり、この世界には連續性のみが存在していて、すべては大いなる全体へと融合し繋がり合うと言ったのではない。そうではなく、さまざまな事物や存在がそこかしこで接続したり分離したりすることによってこの雑多な宇宙が作り上げられると考えたのである。「根本的経験論は世界を、ある部分は連接的に、他の部分は離接的に関係づけられた一つの集積として描

写する」（TR/52）。したがって、ジェイムズの経験論においては、関係によって「接続」されるという連續的な事態と同様に、関係によって「切断」されるという非連續的な面も同時に考慮されなければならないはずである<sup>2)</sup>。そしてそれこそがジェイムズの存在論を多元的なものにしていると考えられる。

本稿ではこのような問題意識のもと、ジェイムズの経験論における非連續性、切断の契機、またそれを基盤として打ち立てられる多元的な存在論について考えていきたい。まず第二節で、ジェイムズの経験論において「項」と言われるもののが基盤を成す「非連續性の理論」を確認する。次いで第三節では、そうしたもろもろの項を接続する「関係」の概念の内実について、ブラッドリーの「関係」概念と対比させつつ、これを「外的関係」と「内的関係」とに分けて明らかにする。最後に第四節で、この「関係」概念によって、いかにしてジェイムズの存在論が多元論として成立しているかを具体的に見ることにしたい。

## 2. 「非連續性の理論」について

### 2. 1 世界を構成する非連續的な単位

ジェイムズが「根本的経験論」の基本的な考え方を提示したのは「『意識』は存在するのか」、「純粹経験の世界」（ともに1904年）の二論文であるが、そこでは、諸々の項や要素をもっぱら分離的なものと考えるヒューム的経験論と自らの立ち位置とを対比させる形で、経験における「連續性」が強調されていた。ここでは連續性を形成する典型的な関係として、同じ一つの自我の内の時間的推移、及びそれに伴う経験の移り変わりが挙げ

1 舞鶴工業高等専門学校 人文科学部門 助教

られ、これが「共 - 意識的推移」と名付けられている (WPE/25)。それが意味するのは、ある経験と別の経験とが継起的に、つまり時間的に立ち現われるとき、この二つの経験を結ぶ連接的な経験である。そこでは対象や関心の同一性は途切れることなく続き、そこで感じ取られる変化そのものが直接に経験されるものの一つと考えられる。ある瞬間の経験とそれに続く瞬間の経験とを連結する推移自身が一つの経験となり、それが生きられた時間の中で連続的につながっていく。ジェイムズが経験の連続性ということで言い表そうとした事態はこのようなものであろう。それに対して「非連續性」は自分の経験から他者の経験へと移行しようとする際に感じられる断絶を表現するために用いられていた (WPE/25)。

ところが『多元的宇宙』(1909年)と『哲学諸問題』(1911年)でのジェイムズの多元論を特徴づけているのは、彼が連続性をその本質として提示していた経験そのものの内に、非連續性の契機を持ち込んだことである。非連續性という言葉が、もはや私の経験と他者の経験との間についてではなく、私自身の経験の内で生じている何らかの事態を指し示すために使われている。

非連續性の理論によれば、時間、変化などは有限の芽やしづくによって発展し、その際には何も生じないか、あるいはある量の諸単位が「一挙に」存在し始めるかのどちらかであろう。この見方からすると、宇宙のあらゆる相貌は有限の数で表すことのできる構造を有することになるだろう。[中略]私たちの知覚的経験の内で実際に行われているのはこうした分離的な (discrete) 合成である。[中略] 実在についてのあなたの認識は、文字通り知覚の芽やしづくによって発展する。知的には、また反省においては、あなたはこれらの芽やしづくを構成要素に分割することができるが、直接に与えられたものとしては、それらはまるごと生じるか、あるいは全く生じないかのいずれかである。 (SP/80)

もしすべての変化がこのようにいわばしづくの形でなされるなら、もし真の時間が、ちょうど時間についての私たちの知覚が脈動 (pulses) によって発展していくように、一定量の持続の諸単位によって発芽し発展するならば、私たちを困らせるゼノンのパラドックスやカントのアンチノミーはなかっただろう。[中略]私たちの感覚的経験はしづくの形で私たちに生じる。時間そのものはしづくの形で生

じる。 (PU/104)

この非連續性の理論によれば、具体的な知覚経験は有限の大きさの単位が一つずつ次々に積み重なっていくことで発展していく。具体的経験は時間の経過に従い連続的なものとして徐々に構築されていくのではなく、一息に生まれ出る芽、しづく、脈動<sup>3)</sup>を単位とする非連續的な過程によって生成変化し、進展する。この非連續性の理論こそ「徹底的に多元論的、経験論的、知覚論的な立ち位置」(SP/88)なのだとジェイムズは言う。こうした諸々の単位と、「経験されるものの内の「本性」と同じ数だけ多くの素材が存在する」(DCE/14)という記述における「素材」とが重ねて考えることのできるものであるとすると、この諸単位の多數性、相互還元不可能性（単位がそれぞれ固有の本性を有しているということ）に、ジェイムズ的な多元論が実在とするところの多性の根源があると考えられる。

## 2. 2 「非連續性の理論」における二つの「連続性」

この「非連續性の理論」において、「連続性」という性質は二つの意味を担うことになる。一つは、非連續性をもとに作られた二次的な産物としての連続性である。現実の変化を連続的な過程として取り扱うことをジェイムズは禁ずるのであるが、この連続性を構成しているのは、本来ひとまとまりの大きさを持った単位を、知性や反省が事後的に分割することによって生じる無限小の断片（そしてその断片もさらに無限に分割できる）である。それゆえ「事物の構造は連続的であって分離的なものではない」という考え方と、無限の分割可能性という考え方とは、密接に結びついている

(SP/81) とジェイムズは言う。事物は本来諸単位による非連續的な構築物であるはずなのに、知性はその諸単位を粉碎してすりつぶし、平坦で等質的で連続的なものをしてしまう。もはやそれは直接的に経験に与えられたままの形を保ってはいない<sup>4)</sup>。

とは言えジェイムズは、この「連続性」という言葉にこのようなネガティブな意味だけを負わせているわけではない。ヴァールのように、「私たちに現れるままに事物を捉えるなら、連続性という考え方を捨てなければならない」とジェイムズは言う。連続性はここでは私たちの知性の虚構でしかない<sup>5)</sup>と断ずるべきではない。ジェイムズは「連続性」にもう一つの意味を与えていた。それは経験を構成する諸単位が相互に繋がって融合するという意味での「連続性」である。こうした諸単位は明確な輪郭を持たず、曖昧な境界を通して互い

に浸透し溶け合っている<sup>6)</sup>。これは「主知主義的な論理が固守し計算の際に使用する諸単位」(PU130), つまりはつきりとした境界線を持つゆえに相互外在的でそれぞれが個々のものとして区別される諸単位とは異なるものである。「経験の諸々の具体的脈動は、私たちが用いるその概念的な代用品がある範囲に制限されているのとは異なり、いかなる明確な限界の内にも閉じ込められない」(PU127)。具体的な経験を構成する単位は互いの境界で繋がり合っており、そうした構造が連鎖していくことによって、ジェイムズが「知覚の流れ」と呼ぶものが形成される。つまりもろもろの単位と、それらの間に介在する境界とが、あわせてまるごと「知覚の流れ」と言われるのである。このことは、経験と経験とを結びつける関係をも経験に含めて理解しようとする根本的経験論のテーゼを指し示している。したがってこの項と項との「溶け合い」という事態そのものが、経験と経験とを結びつける連接的経験、とりわけ典型的には推移の関係を意味しているのであって、非連續性の理論を採用しながらも、なお経験に連續的という性格を帰すことのできる根拠がここにある。

## 2. 3 「見かけの現在」

「非連續性の理論」の基本的なアイディアは、すでに『心理学原理』(1890年)において「見かけの現在(specious present)<sup>7)</sup>として現れていたように思われる。ジェイムズは「見かけの現在」と「厳密な現在(strict present)」という二つの現在を区別する。後者の「厳密な現在は全く理念的な抽象物であり、決して感覚において得られないばかりでなく、おそらく哲学的な省察に不慣れな人々には考えられることすらない」(PP/573)とされる。これは数学的な点としての瞬間であり、それを経験が現在として捉えることのできないような瞬間である。事後的な反省だけがそれを「現在であった」として同定しうるのであり、いわば生きられた時間を構成することはない。

それに対して「見かけの現在」は、「厳密な現在」が「ナイフの刃」として表現されるのとは異なり、「それ自身の一定の幅をもつ鞍のようなもの」(PP/574)とされる。「私たちの時間知覚を構成する単位は「持続」であり、いわば船首と船尾を備えている——つまり前方を見る端と後方を見る端とを備えている」(PP/574)。「見かけの現在」は「厳密な現在」とは違って、それぞれある一定の幅をもっており、その一方の端は過去に向き、他方の端は未来に向いている<sup>8)</sup>。「見かけの現在」は「厳密な現在」を回顧的時間感覚(retrospective sense of time)と予期的時間感覚(prospective sense of time)<sup>9)</sup>とが挟み込むという構造を成しているとい

うことでもできるだろう。より正確に言えば、「厳密な現在」は経験不可能なものであるから、直近の過去と直近の未来との間にあつたらしきものを、後から指して「厳密な現在」と呼んでいるのである<sup>10)</sup>。

本論の視点からして重要なのは、このような「見かけの現在」が単位として組織されることで、私たちの時間についての知覚が構成されていくとジェイムズが考えたという点である。ここに「非連續性の理論」の原点を見出すことができる。この「見かけの現在」は「あらゆる考えられた時間の根源的な模範と原型」(PP/594)と言われる。「考えられた時間(conceived time)」とは生きられたものではない時間、直接経験されたものではない時間、「見かけの現在」に含まれない時間であって、つまり「厳密な現在」、過去として想起された過去、いまだ「見かけの現在」になったことのない時間としての未来である。「見かけの現在」がこれらの原型であるのは、「より長い時間はこの曖昧に結合した単位を付け加えることによって、またより短い時間はこの単位を分割することによって考えられ、私たちによって習慣的に記号を通して思考される(PP/603)」からであるとジェイムズは言う。私たちは直接に経験している「見かけの現在」という単位に特定の操作を施すことによって、つまりそれを複数化して相互に付け加え大きくしたり、それらを部分・要素へと分解して小さくしたりすることによって、元の単位とは異なる時間を構築するのである。

尤も、ここで単位という言葉で表現されているものはもっぱら時間的な進展の構成に関わるものでしかない。「ある量の時間、空間、変化等々は、有限数の時間、空間、変化の最小量から構成されたものである」(SP/80)という『哲学の諸問題』の言葉からも分かるように、「非連續性の理論」では有限の諸単位が連なって現実的経験を成すという構造が、時間的にも空間的にも当てはまるものとして考えられている<sup>11)</sup>。ともあれ「非連續性の理論」はジェイムズの心理学に基づく考え方なのであって、経験が具体的に立ち現れる様を記述しようとする試みであると言えるだろう。

## 3. 「関係」概念について

経験は諸単位によって構成されるという「非連續性の理論」について前節で確認したが、ここではそのような単位を、関係がそれらの間に成立するところの項そのもの、あるいは関係によって複数が寄り集まって一層大きな項を成すものとして捉えることにしたい。また上で諸単位が溶け合うとか融合するとか繋がるなどと述べたが、そのよ

うな事態を「関係」として捉えることにしたい。ここでは、こうした諸単位を接続する又は切断する「関係」を、ジェイムズがどのように考えていたかを検討する。そのための手助けとなるのが、フランシス・ハーバート・ブラッドリー（1846-1924年）の「関係」概念である。というのもジェイムズはブラッドリーがあらゆる関係を「内的（internal）」なものとしたことに対する反論として、「外的関係（external relation）」の存在を前面に押し出し、その意義を明らかにしようと努めたからである<sup>12)</sup>。ブラッドリーを経由することで、ジェイムズの「関係」概念の理解がより深まるようと思われる。注意しなければならないのは、「ブラッドリーがあらゆる関係を内的なものとみなし、ジェイムズがあらゆる関係を外的なものとみなした」という単純な切り分けは誤りであるということである<sup>13)</sup>。ここでの対立軸は、「内的関係」を取るか「外的関係」を取るかではなく、「すべての関係は内的である」（ブラッドリー）か、あるいは「内的関係と同様に外的関係も存在する」（ジェイムズ）かである。まずブラッドリーの「関係」概念について、彼の主著『現象と実在』（1893年）にしたがって、本稿の主題に関わりのある限りで見てみよう<sup>14)</sup>。

### 3. 1 ブラッドリーにおける「内的関係」と「外的関係」

まず、ブラッドリーが「すべての関係は内的である」という立場を取ったという言い方は、厳密に言えば正確でない。というのも彼にとって、そもそも項とか関係とかいったものは、実在や真理ではなくあくまで現象（appearance）に属するものだからである。それらは「より具体的で質的な統一体に由来する、それ自体としては单なる抽象物」<sup>15)</sup>、「基底的な統一体の不適切な表現」、「直接的な全体性の不完全で不十分な発展」<sup>16)</sup>に過ぎない。ここで「統一体」、「全体性」と言われるものはいわゆる「絶対者（the Absolute）」であり、人間が直接認識したり把握したりすることのできない超越的な存在、唯一の実在としての神である。それを関係や項によって知的に思考することは確かに私たち有限者にとって有用なことであるが、そうして思考されただけのものを実在的なものと取り違えてしまうと矛盾が生じる<sup>17)</sup>。ブラッドリーが第一とする実在は絶対的なもの、「下 - 関係的」、「超 - 関係的」<sup>18)</sup>なものであり、項や関係はそこから派生する二次的で相対的（relative）な現れでしかない。

その上でブラッドリーは「関係」（と項）という考え方を批判するにあたって、とりわけ「外的関係」に矛先を向け、「内的関係」の方を前面に出して取

り上げることはしない。「内的関係」のテーゼは、「項が関係に依存しているのと全く同様に、関係も項に依存しているのでなければならない」<sup>19)</sup>という事態、またある項が関係によって他の項に結びついているとき、後者が前者によって必然的に含意されているという事態を指し示す。関係と項、項と項とは相互依存の関係にあり、それらをばらばらに孤立させて独立した実体とすることはできない。関係が変化すれば項は変化し、項が変化すれば関係も変化する。ここで項と関係は内的に、つまり本性的に繋がり合って一体となるのであるから、もし「外的関係」が全く存在しないとすれば（ブラッドリーは存在しないと主張する）、このような「内的関係」をどこまでも推し進めてあらゆる事物にまで延長していくことができ、究極的には絶対者に至ると考えられる。もちろんそのような時、「内的関係」はもはや関係と言えるものではなくになっていることであろう。したがって「内的関係」は肯定されることもないが、強く否定されるというところまではいかない。つまりブラッドリーにとって、相対的でしかない関係でありうるのは「外的関係」のみであり、「結局のところブラッドリーにとって、内的関係の原理は、関係の外在性のテーゼほど真理から離れたものではない」<sup>20)</sup>と言えるのである。

ブラッドリーは「あらゆる関係は單に外的なものであり、その項に対して何らの差異も作らない」ということを、私は認めない<sup>21)</sup>と言うのであるが、「外的関係」はどのようにして否定されるのか。前述したように「関係」という概念自体、より大きな統一体の実在性を第一とするブラッドリーにとっては矛盾に満ちたものなのであるが、それに加えて「外的関係」は無限後退に陥るから非合理であるという批判も行う。それは次のようなものだ<sup>22)</sup>。関係や項を相互に独立したものと考えてみよう。項Aと項Bという二つの項があると仮定すると、この二つをつなぐ関係Cが、その外部から、つまりAとBの本性とは関わりなく、両者の間に入ってくることになる。CはA、Bと同じく一つの独立した実体であるため、今度はAとC及びCとBとの間をつなぐ新たな関係が二つ必要となる。このような過程が無限に繰り返していくため、いつまで経ってもAとBとの間は架橋されることがなく、果てしない無限後退が導かれる、ということになる。以上から、ブラッドリーは「外的関係」の存在を完全に否定し、「関係」なるものが現象的なものとしてあれ可能だとすれば、それは「内的関係」という形においてでしかないと考えるのである。

### 3. 2 ブラッドリーに対するジェイムズの批判

このようなブラッドリーの「関係」概念批判に対して、ジェイムズは次のように応答する。第一に、宇宙には「外的関係」と呼ぶにふさわしいものが全く存在せず、あらゆる事物が内的に繋がり合って「各々が全体の中に、全体が各々の中に」を要とする「全体的合流の統合」、「隅から隅まで (through-and-through) 型の統合」(TR/52) を成すなどということは、経験論者であるジェイムズにとって全く信じられない。世界は目に映るままの雑多なもの、混沌としたものであり、多様な「部分的な合流」が生じる「連鎖状の世界 (concatenated)」(TR/52) である。そこではさまざまな事物がそれぞれ独自の性質や実在性、(後で述べるように相対的な) 独立性をもって存在している<sup>23)</sup>。ブラッドリーとジェイムズは、人間の認識が不完全である限り私たちは経験から始めるしかないというところまでは一致するが、ブラッドリーがこの有限な世界から目を背けて絶対的なものの存在を思弁的に構築しようとするのに対し、ジェイムズはあくまでそこにとどまり続けようとする点で袂を分かつ。「関係」に対する両者の態度の差異は、このような方法論的な差異と軌を一にしている。

また第二に、ジェイムズにとってブラッドリーの絶対主義は、思弁によってこしらえられたあまりにも極端な二者択一を突きつけるものであって、現実的で具体的な世界の実相を捉え損なっている。すなわち、一切の関係は「外的関係」であるか「内的関係」であるかという二者択一、また一方の「外的関係」においては関係とそれがつなぐ項との間にはいかなる影響をも与え合うということがなく、他方の「内的関係」においては関係が変化すれば項は一変し、項が変化すれば関係は一変するという二者択一である。ブラッドリーのように、「環境とのあらゆる関係から切り離された有限な事実の各々を認めるか、でなければ環境を全く持たず、すべての関係を自らの内に包む統合的な絶対者を受け入れるか」(PU/35) という両極端な立場のどちらかにつくように迫るのではなくて、「「独立」を絶対的に (simpliciter) とることはやめ、それを相対的に (secundum quid) 取るようにせよ (PU/32)」とジェイムズは言う。

ここで「内的関係」と「外的関係」に対するジェイムズの立場は中間的なものとなる。すなわち、世界にはさまざまな関係が無数に存在しており、そのなかには内的なものも外的なものも存在すること、また「内的関係」と言っても必ずしも項の性質を刷新してしまうものではなく、「外的関係」と言っても必ずしも項と全く無関係にただあるというわけではないということが、ジェイム

ズの主張するところなのである (TR/54-55)。一言でいえば、彼は「外的関係」と「内的関係」との差異を、本性の差異ではなく程度の差異として捉える。ジェイムズはこうして、ブラッドリーの絶対主義的な、あれかこれかのロジックを骨抜きにしようとする。

#### 4. 「外的関係」と存在論的多元論

##### 4. 1 グラデーションとしての諸関係の差異

ジェイムズは「関係があるとすればそれはすべて内的である」という主張を批判し、「関係は確かにこの世界に実在的なものとして存在し、しかも関係には外的なものもあれば内的なものもある」という立場を取ったことを前節で明らかにした。ここでは、とりわけこの「外的関係」こそが、第一節で述べた「非連續性の理論」とともに、ジェイムズの多元的存在論を可能にしている根本的な概念であるということを示す<sup>24)</sup>。

いかなる本もいかなるテーブルも関係を取り結ぶことはできるが、その関係は両者の存在によってではなくそれらのその時々の状況によって、その場限りで作り出される。経験のあまりに多くの連接性 (conjunction) がこれほど外的に見えるからこそ、純粋経験の哲学はその存在論において多元論へと傾かなければならないのである。(TR/53-54)

繰り返すことになるが、ジェイムズは内的関係と外的関係との違いは程度の差異によるものだとして、諸関係を実質的には一元的に考えている。またこの引用でも「多くの連接性がこれほど外的に見える (seem)」という言い方をし、ある関係が客観的及び絶対的に「外的」であると断言することを留保している。この引用の少し前で、ジェイムズは二つの「関係」 = 「連接性」に関して次のように述べている。一つは「内密な連接性」であり、それはたとえば「類似」という関係が与るものである。二つの項が互いに類似しているとすれば、その類似性は項自身の本性に起因するものなのであって、類似関係それ自身がその二つの項の場所や時間といった偶然的な要素から影響を受けることはない。もう一つは「外的連接性」と言われるものであり、このような関係は項の外側に関与するだけであってその内的本性には関連をもたないとされる。そしてこれこそが純粋経験の哲学の存在論を多元的なものにしていると言われるのである。この二つの関係の違いを程度の差異として、それも内的・外的という基準による程度の差異として捉えるとはどのようなことなのか。

このことを一層詳しく検討する。

「純粹経験の世界」に戻ってみよう。「諸関係はさまざまな程度の内密性をもつ」(WPE/23)とジェイムズは言う。最も外的のは単に相互に「共に」あるという関係であり、ここから同時性、時間・間隔、空間的な近接及び距離、類似、差異などと続き、最後に最も内密な関係として自己内の継起的な諸経験間の関係がくる。こうした諸関係は英語の不変化詞でも表現され、内密性が低いものから高いものへ、with, near, next, like, from, towards, against, because, for, through, myと並べられる。と言っても、これであらゆる関係が網羅されたわけではない。たとえば「類似」を取ってみても、そこにはさまざまな程度差が存在する。一方の極に純粹に内密な関係が、他方の極に純粹に外的な関係が想定され、あらゆる関係はその両極の間を無数のグラデーションをもって揺れ動くと考えてよいだろう。

したがって、上で互いに非連續的な諸項が溶け合うことを「関係」として捉えると述べたのはいささかミスリードさせるものであったかもしれない。あらゆる諸経験は確かに何らかの仕方で繋がり合っているのであるが、しかしその関係の仕方はその「内密性」の度合いに応じてさまざまに異なっている。「現れるままの姿で捉えると、私たちの宇宙はその大部分が混沌としている。あらゆる経験は諸々の連結から構成されているが、ただその一種類だけで全経験を貫くような連結は存在しない」(WPE/24)と言われるのはそのような意味である<sup>25)</sup>。空間内に二つの項があるとき、それらが互いに類似しており本性そのものから内的関係を取り結ぶような接続をなすこともあれば、ただ単に位置的に隣にある場合にそうであるような、外的と言うのにふさわしい内密性の低い関係もあるだろう。「外的」と「内的」と言われるには程度の差異にすぎないのであるから、両者が全く性質を異にするわけではない。だから「溶け合う」と言ってもその仕方には濃淡があるのであって、ただ一通りの関係がすべての部分をのっなりと画一的に繋ぎとめていくわけではない。そうではなくて、具体的な経験の世界において、項はさまざまに濃淡によって他の項と何らかの関係を取り結び、その関係がもつ内密性（あるいは外在性）の強度に応じて接続と分離とを生み出し、私たちが生きる混沌とした宇宙を作り上げている。

#### 4. 2 多なるものの世界

最後に、この二つの関係が協同することによってジェイムズが実在的と考えていた宇宙が成立している様を、具体的な例に沿って記述してみたい。これは空間的な位置関係によって考えるとわかり

やすいだろう。ある本とあるペットボトルとが20cm離れて並んでいるとき、この関係は外的と言われる。なぜならこの本はペットボトルから30cm離れていることも、ペットボトルの1m下にあることも、私たちには難なく考えられるからである。20cm離れて並んでいるということは、この二つの物の本性から必然的に導出される関係ではなくて、外部から偶発的に引き起こされた位置関係なのである。

しかし何度も繰り返すが、「内密な」と「外的な」という二つの形容詞によって表されるのは、あくまで相対的な差異でしかない。「外的な」接続と言われるものも、それよりも内密でない接続からすれば、より「内密な」接続ということになるのであって、あらゆる接続関係はこの「内密性」という一つの尺度によってすべて異なっているのである。先ほどの例をもう一度使おう。ここに一冊の本と一本のペットボトルが隣り合って並んでおり、この二つはそれぞれ一つの個物として、互いに外的な関係を結んでいるとする。しかしこの本にはカバーがされており、またこのペットボトルにはキャップがしてあると考えてみると、本とカバー、ペットボトルとキャップとは互いに外的なそれぞれ別の個物であると捉えることもできるだろう。それでも、本とカバーとの、またペットボトルとキャップとの間に成り立つ関係の内密性は、本とペットボトルとの間に成り立つ関係の内密性よりも、一層高いものであると言えるだろう。だからこそ、本とカバーとが合わさった一冊の本として、またペットボトルとキャップとが合わさった一本のペットボトルとして、それぞれ一つの個物と考えられることができたのである。ペットボトルとキャップとの関係を外的とすればそれらは二つの個物として、それを内密とすれば一つの個物として、捉えられる。接続関係に修飾される「内密な」と「外的な」という二つの表現は相対的なものなのであり、前者の側面を強調すれば接続が、後者の側面を強調すれば分離が現われ、特にこの分離の存在によって、根本的経験論は多元的存在論にならざるを得ないのである。

プラグマティックに解釈されると、多元論、あるいは宇宙は多なるものであるとする学説が意味するのは、単に実在の種々様々な部分は、外的に関係づけられているかもしれないということである。多元論的な見方にしたがうと、思考することができるすべてのものは、いかに広大で包括的なものであろうと、何らかの種類の、あるいはいくらかの大きさの純粹に外的な環境をもっているのである。諸事

物は数々の仕方で相互に「ともに」あるが、しかしすべてのものを包括したり、すべてのものを支配したりするものは存在しない。  
(PU/145)

## 5. おわりに

ここまで議論で、ジェイムズは自らの経験論のうちに「非連續性の理論」を導入することによって、世界に存在するもろもろの事物は、それぞれ多様で一定の大きさを持つ有限な諸単位によって非連續的に構築され、かつ非連續的な過程によって時間的に進展・変化すると主張した。こうした諸単位は互いに繋がり合うのであるが、その繋がり合う仕方こそが「関係」である。ジェイムズはブラッドリーの「関係」概念批判、特に「外的関係」概念の批判に対して異を唱え、あらゆる関係はその内密性・外在性によって異なっており、こうした無数の諸関係が接続や分離を作り出すことでこの世界を多なるものとして構成していると考えたのであった。このようにジェイムズの経験論では、混沌を恐れることのない多元的な宇宙観、あえて統一的な原理を求めることがない、雑多なものを雑多なまま肯定しようとする世界観が提出されているのである。

本稿では「関係の外在性」の概念を、存在論的多元論を成り立たしめている根拠として捉えようとした。ところがジャン・ヴァールの言葉を引けば、「ウィリアム・ジェイムズの多元論、実在論、プラグマティックな認識論、可能性の理論、時間論、多様な概念は、関係の外在性の肯定に結びついている」<sup>26)</sup>のであって、この概念は本稿で扱った問題だけにはとどまらない射程をもつ。とりわけ注目しなければならないと思われるのは、この「関係の外在性」の概念は、ジェイムズにおける偶然性、自由意志、創造、改善論といった、それ単独で取り出すだけでは扱いにくい諸問題にとって極めて重要な役割を果たしているのではないかということである<sup>27)</sup>。実際ジェイムズは、「外的関係は各々の歴史における一時的な偶然事にすぎないよう見える」(PU/41)と言ふ。もちろんそれは同時に、絶対主義的な哲学における神による必然性、また機械論的自然観における因果的な必然性への批判とも結びつくだろう。こうした問題に対するジェイムズの直接的言及の少なさによって生じている困難は、「関係の外在性」という視座から光を当てることで、いくばくか解消することができるかもしれない。

## 参考文献：

- 最初に凡例を示しておく。

ジェイムズの著作からの引用・参照には以下の略号を用いる。略号の後ろの数字は Harvard University Press 版の全集の頁数である。

*The Principles of Psychology* (1890) =PP

*A Pluralistic Universe* (1909) =PU

*Some Problems of Philosophy: A Beginning of an Introduction to Philosophy* (1911) =SP

また、*Essays in Radical Empiricism* (1912)に収録された諸論文からの引用・参照には以下の略号を用いる。略号の後ろの数字は同じく Harvard University Press 版の全集の頁数である。

Does 'Consciousness' Exist? (1904) =DCE

A World of Pure Experience (1904) =WPE

The Thing and Its Relations (1905) =TR

引用・参照は（論文・著作の略称/原著の頁数）といったように行うこととする。

2) 本研究のこのような問題意識は、千葉雅也『動きすぎてはいけない：ジル・ドゥルーズと生成変化の哲学』

(河出書房新社、二〇一三年)に強く触発されたものである。千葉は本書で、ドゥルーズの存在論においてあらゆるものがあまりに楽天的に次々と繋がってしまうように解釈する先行研究を退けて、むしろ「非意味的切断」の契機の重要性を強調した。とりわけ第二章では、ドゥルーズのヒューム読解を参照することで「関係の外在性」のテーゼを詳細に検討し、それによって、一切が接続して全体性を形作るという〈存在論的ファンシズム〉がいかに破壊されていくかについて論じている。「接続的／切断的の各面は、ドゥルーズのベルクソン主義／ヒューム主義に対応する」(本書二七頁)という千葉の指摘は、ジェイムズにもほとんどそのまま当てはまるものではないかと思われる。

3) ジェイムズが私たちの時間感覚の生起の仕方を「脈動」という生理学的な言葉によって表現しているのは、「「意識」は存在するのか」の終結部で、カント的な「我思考する」を「我呼吸する」に言い換えたことと対応している(DCE/19)。

4) ジェイムズにとってたとえばゼノンの逆説は、このように現実の運動を構成している有限の諸過程を知性によって無限に切り分けることに由来する誤りである。これはベルクソンの言う「等質的空間」と同じ事態を指しているように思われる。Henri Bergson, *Essai Sur Les Données Immédiates De La Conscience*, Presses Universitaires de France, 2007, p. 68-74.

5) Jean Wahl, *Les philosophies pluralistes d'Angleterre et d'Amérique*, Félix Alcan, 1920, p.200.

6) 「私たちのすべての感官に由来する所与は、知覚の流れに入り込んで広大な全体に溶け込み、それぞれが大小の役割を占めている。さらにこうした部分のすべては自らの統一を壊さずに保っている。その境界は視野の境界と同じく明瞭ではない。境界とは介在するも

のであるが、知覚の流れにおいて介在するのは、やはり知覚の流れそれ自体の部分以外にない。そしてこれらの介在する部分には、それが分離するものが溢れ出でている。だから私たちが区別し概念的に隔離するものであっても、知覚としては隣接部分にはまり込み、浸透し、拡散しているということが分かる」(SP/32)。

7) この言葉を作ったのは E. R. Clay であり、実際ジェイムズは彼の言葉をかなり長く引用することでこの概念を議論に導入する。なお Clay はボストンのタバコ製造業者である E. Robert Kelly の偽名であることがわかっている。Holly Anderson, "The Development of the 'Specious Present' and James' Views on Temporal Experience", in Valtteri Arstila and Dan Lloyd (ed.), *Subjective Time: The Philosophy, Psychology, and Neuroscience of Temporality*, The MIT Press, 2014.

8) 伊佐敷は幅をもった「見かけの現在」の特徴として、「時間が経過しても過去へ移行しない」、「その中で継起的経験が生じうる」の二つを挙げている。「見かけの現在」について『科学基礎論研究』第三十三号第一巻、科学基礎論学会、二〇〇五年、十一頁。

9) PP/571.

10) マイヤーズが「過去と未来を離れた知覚可能な現在などはない」と述べたのは、ジェイムズの言う「見かけの現在」は純粹な現在としての現在ではなく、つねに直近の過去と未来とで構成された持続する現在だということを強調するためである。Gerald E. Myers, *William James: His Life and Thought*, New Haven, Yale University Press, p. 144.

11) 他にも『多元的宇宙』には以下のような記述がある。「自然は卵全体を一舉に作るか、あるいは全く作らないかであり、それは他のすべての自然の単位についても同様である」(PU/103)。

12) ブラッドリーが関係について「内的」というところを、ジェイムズ自身は「内密な(intimate)」と呼んだり、また「関係」を「連接性(conjunction)」という言葉で言い換えたりしているという用語上の違いがある。しかし本稿では、両者が「内的関係」、「外的関係」という同じ問題系に関わっていると考え、その違いにはこだわらなかった。

13) 「私たちが抵抗しなければならない観念は、関係はすべて「内的」であるか「外的」であるかのどちらかでなければならない、というものである」(Mathias Girel, «Relations internes et relations spatiales: James, Bradley et Green», dans *Archives de Philosophie*, Tome 69, Paris, Beauchesne, 2006, p. 396)。

14) ブラッドリーの「関係」概念の検討は、スプリガがラッセルと対比させつつ極めて詳細に行っている。Timothy L. S. Sprigge, *James and Bradley: American Truth and British Reality*, Open Court Publishing Company, 1993, p. 393-434.

15) F. H. Bradley, *Appearance And Reality: A Metaphysical*

*Essay*, Oxford At the Clarendon Press, 1966, p. 516.

16) Ibid., p. 522.

17) 「ブラッドリーにとって諸事物についての実在的な真理は、世界のうちに独立した諸実体が数多くあるということではない。全体としての宇宙がまさに実際に存在するが、それに対して何らかの知的ないしは実践的の把握を行うために、私たちはそれを判明な諸事物に分割するのである」(Timothy L. S. Sprigge, *James and Bradley*, p. 404)。

18) Jean Wahl, *Les philosophies pluralistes d'Angleterre et d'Amérique*, Empêcheurs de Penser en Rond, 2005, p. 35.

19) F. H. Bradley, *Appearance And Reality*, p. 26.

20) Mathias Girel, «Relations internes et relations spatiales: James, Bradley et Green», p. 401.

21) F. H. Bradley, *Appearance And Reality*, p. 513.

22) 以下の記述は *Appearance And Reality*, p. 17-19 を参照して、議論をかなり単純化してその大まかな概要だけを示したものである。

23) 「ジェイムズが宇宙のうちに諸関係を認めるのは、宇宙をより秩序あるものとするためではなく、単に宇宙をより実在に合致するものとするためである。実在は錯綜しており、混沌としている」(Jean Wahl, *Les philosophies pluralistes d'Angleterre et d'Amérique*, p. 174)。

24) 「関係は項に対して外的である。ジェイムズが自らを多元論者と称するとき、彼は原則的にはそれ以外のことを語っていない」(Gilles Deleuze, *Empirisme et Subjectivité: Essai Sur La Nature Humaine Selon Hume*, Presses Universitaires de France, p. 109)。

25) 桝田啓三郎・加藤茂共訳で白水社から出版されている『根本的経験論』には「外的関係を強調すると、超克したはずの原子論や要素主義との関係が曖昧にもなる」(二四二～二四三頁) とあるが、これはジェイムズのこの言及を見逃しているために起こった誤解である。ジェイムズは外的連接性を導入したからといって、あらゆる関係が外的であるとしたのではない。世界には様々な連接関係があるが、その中のある一定のものが外的と呼ぶにふさわしいものであって、そのために根本的経験論は存在論としては多元的なものとなるのである。

26) Jean Wahl, *Les philosophies pluralistes d'Angleterre et d'Amérique*, p. 177.

27) 「偶然性と分離、この二点が、外在性の意味である」(千葉雅也『動きすぎてはいけない』九九頁) という千葉の指摘は注意に値する。これは基本的にはヒュームないしはドゥルーズに向けられたものだが、ジェイムズに対しても妥当であるように思われる。ヒュームの偶然性を徹底させたメイヤーの議論も、ここでジェイムズと結びつくであろう。

(2016. 12. 16 受付)

**WILLIAM JAMES'S PLURALISTIC ONTOLOGY: WITH A FOCUS ON THE CONCEPT OF 'RELATION'****Shusuke YAMANE**

**ABSTRACT :** The purpose of this study is to elucidate the structure of William James's pluralistic ontology which is one of the major features of his 'radical empiricism'. Its fundamental thesis is that "the relations that connect experiences must themselves be experienced relations, and any kind of relation experienced must be accounted as 'real' as anything else in the system". According to this theory, all of the experienced terms can be connected by relations which stand between them, and many researchers of James's philosophy have emphasized the aspect of the continuity in his ontology, or 'Weltanschauung'.

However, James does not think that everything in this world is continuous. He also says that "conjunctions and separations are, at all events, coordinate phenomena which, if we take experiences at their face value, must be accounted equally real". We must consider the discontinuity of our experience, as well as its continuity. In order to do so, it is necessary to focus on the concept of 'relation', in particular that of 'external relation'. By comparing with Bradley's concept of 'internal relation', we can clarify what 'external relation' means and show how this relation forms James's pluralistic ontology.

**Key Words :** *William James, F. H. Bradley, external relation, pluralistic ontology*